

5

4

3

2

1

20

9

8

7

6

5

4

3

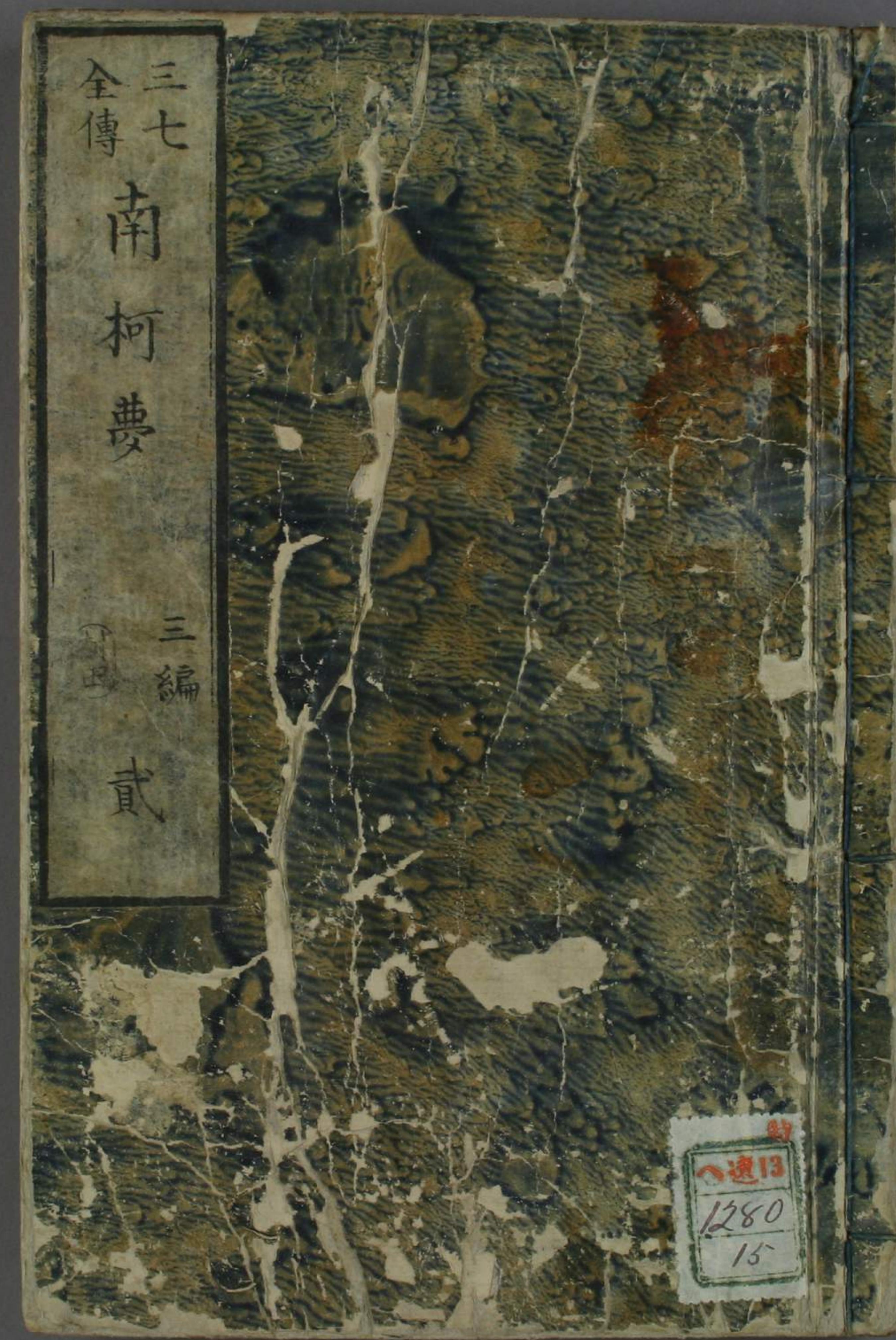
2

1

1m

0

•



1280
15

東都

曲亭馬琴編次



霸**ビ**族の新閑

三七初花の夜。枕御前のひん慈み小うり。辛く命を
助られ。水門と脱牛れども。親のゆのまことくま。公よのやうの
むら。主君の采地又渴りをうん。守を忍まず。うらがる。小似たり。直
ち大糸を立退く。さもかゝもせぬとらひて。城外より留らば。驚て初花を
扶被ぐ。渡速を投す。通宵走る程。次の日の熏昏。彼津かへれど
旅宿をりこら。小五七日逗留。平城のみ体を安定期。松平作が自殺。父の罪を勧解。半之進ひ。主の勘當を免され。灰より火えふけれど。平作が今果かほげ。

主君順勝の内意を以て人の心よりもあらねば。羊せものゝ。されば
傳すべし。されど父が因居恩免のゆゑに一定すれど。うきのまがいと
堪えど。只憚づて。平作が枉死す。彼よりかへる所無く。母のうち
夫婦のうち。夏山がうちの中の小あそんとらひす。また
夫婦は今更よ。とが方の秋の物。と更よ歎の数を。慰めし。也
未も。と。頃日の旅。故のそらす。夫婦額と。便りあり。
と。彼夷うち相譚つ。と。羊七が。限ある。路費をりて。限あり
旅宿せ。終よ飢渴よ苦。市人の袖よほん。縣居の門よほら。主
親の名。汚す。親の罪を。贖ふ。されど。ほたる水の月よ
身を殺す。親の罪を。贖ふ。されど。ほたる水の月よ
愛。仇み。宿の花に括ねど。薄命の係る所。欽。これから色情の奴。あり。

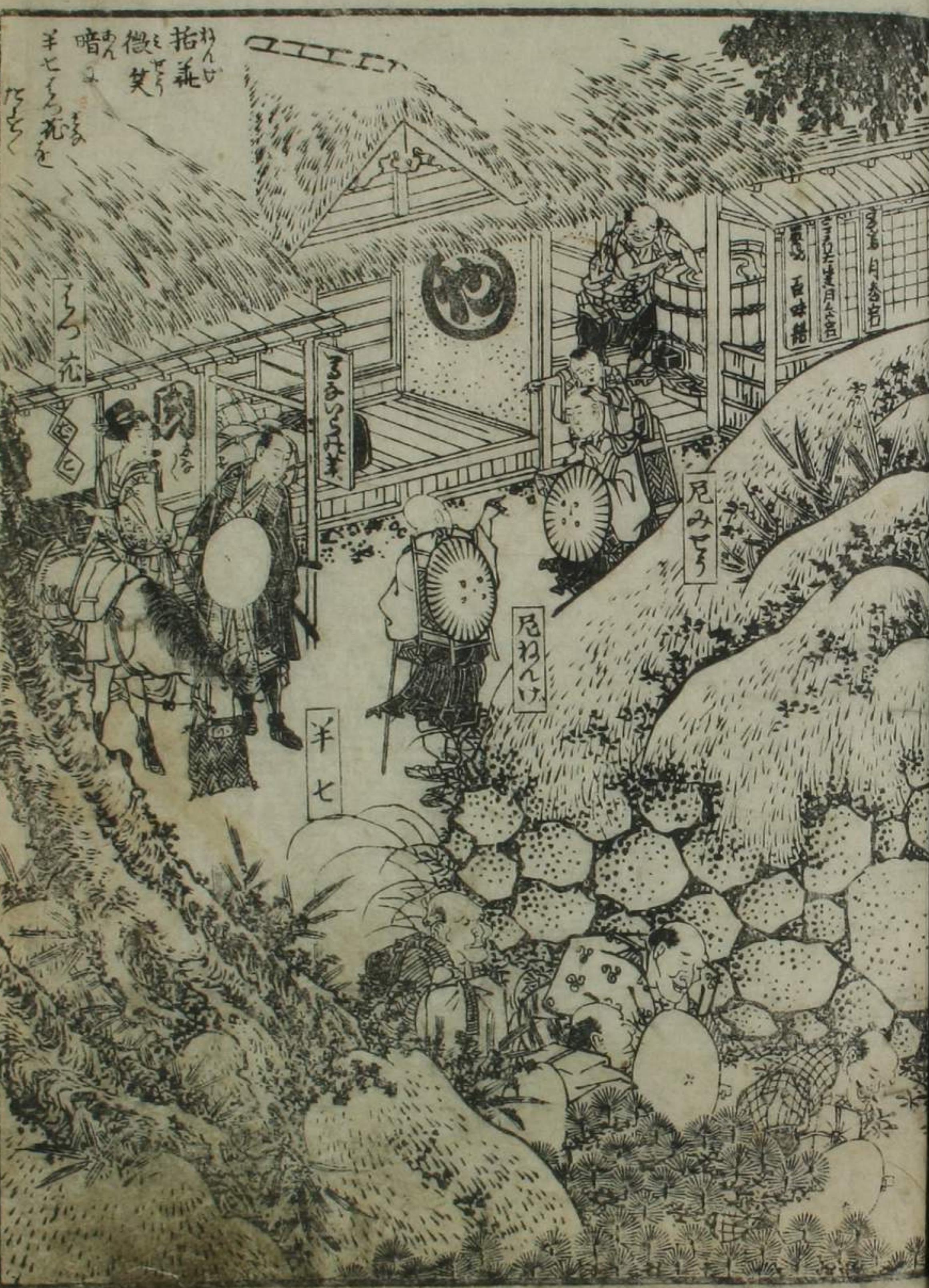
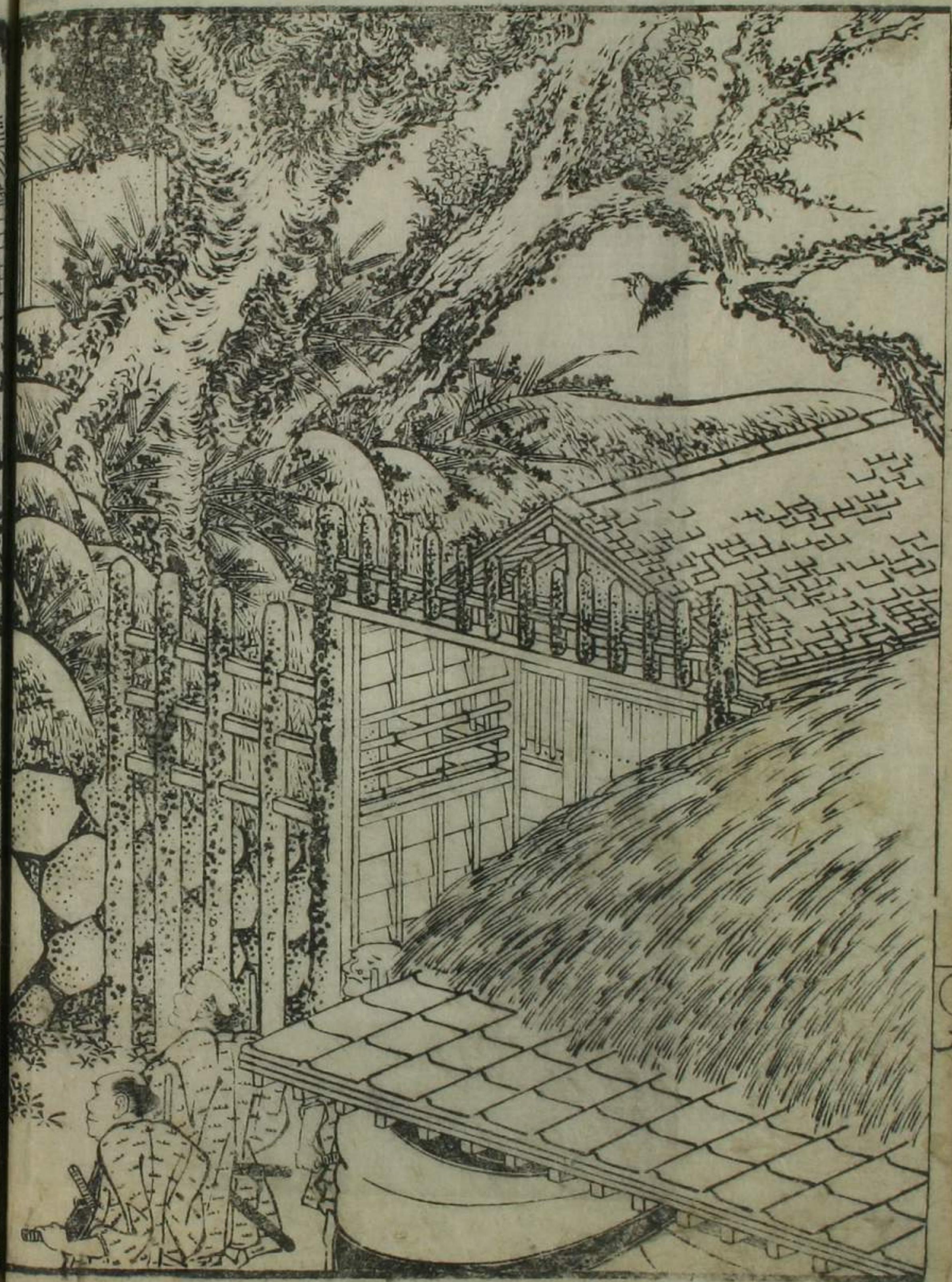
八海の御比。浮名をうぶ。阿容。阿容と。存命。と。二親。けも。やあ。や
憎。でも。憎。め。ぞ。ひ。が。ひ。う。と。ら。ひ。あ。う。ん。あ。う。り。と。も。玉枕。御前。町寧
小諭。さ。を。あ。ひ。一。夏。も。あ。れ。ば。故。う。て。損。る。余。よ。や。う。ぞ。只。才。を。碎。た。骨
を。粉。す。る。風流士の宝刀を。索。出。し。それを。主君。小。じ。と。や。う。て。身の
恨を。勧。解。す。う。さ。び。この世。う。ぐ。ら。小。主。親の。美。顔。え。す。る。時。も。あ。が。す。
されり。ひ。小。り。わ。如。月。未。谷。る。木。精。塚。の。崩。た。る。と。う。有。一。ク。一。縁。乃
妖火。西。を。投。て。走。失。ら。と。風。声。の。ま。た。ら。全。く。彼。宝。刀。の。塚。う。り。走
西。圃。へ。走。ま。た。る。と。や。め。う。ん。ず。ら。ん。む。一。吳。王。の。宝。劍。が。ぐ。く。ら。走。ま。て。楚。圃。
い。翁。と。る。漢。土。の。書。み。の。え。た。り。西。う。と。バ。果。も。う。れ。ど。陰。の。が。風。流。女。
い。の。見。よ。大。内。家。の。老。臣。陶。晴。賢。が。家。よ。う。れ。ど。お。ま。た。が。一。定。入。り。ら。る。
風。流。士。が。あ。う。と。彼。ゆ。よ。妙。た。る。う。る。べ。ま。う。の。街。よ。せ。く。賣。ト。小。尚。世。

ヨリアラハ所ニ違ひ。トトロ直ニ周防ニ越へ密ニ小彼宝刀を索す。
トハトドモ陶ハ才ガ養えず。又大内殿ニ主君の縁者として至り。
リアルハ多き。明白よりあらず。外より憑む樹下もす。がん水
竹とよひあふ。と向へ初花且く尋思して。これらが家々の室に挂けて
候。前年風流士の宝刀を拭とす。擦三次を般。よきに面目を失ひ。そ
處不義洛を逐電せし。刀冶同樹といふ。妻のまらへが家々の美
母のまよ。親族もそぞりとぞ。やと同樹ニ周防國ニ移る。何事の
縁より。と笑ひてゐる。彼外見。音耗。たゞうき
候。あれハ今あは存命。てありやあんせんからねども。ばび行て名告
をせば舊を好を化す。うりで強面りをうとべ。ひたちゆへか。と
同答す。が。羊七笑ひゆく。放びうき微妙。ひつをあかのう。され
彼同樹がより安つ。彼が義洛より日暮。それもひまもいき。生れど
アスラバタれ。せふありうへ是つみけれど當時外祖父典照め。よ
再生の恩を稟う。と。安ば。やその子。その孫の世う。た。安下に
まつことなり。べく。今同流士の宝刀を奪ひ。よ。刀冶の身を倚す。
あひぐから便宣をぬ。誘ひ。一月のと。彼北へ赴くべ。と。夫婦あらす。商議。次の日浪義の客店を出て和泉の境す。
ゆく程よ。往返入。足を空す。ちり。欣勢。観ゆ。わくと見え。が。
半七初花の道次。市店。立す。そのすうに向つ。の日。うち。陶が
裁縫の手を。まく。義隆。父。まく。持明院入道。忍。行を。ら。わ
あり。忠義の志。あり。の。悉。陶。晴。賢。が。か。繫。防。長。豊。荒。の。西。國。わ
く。陶。が。横領。あ。る。よ。風。吹。あ。れ。す。じ。ぶ。羊七夫婦。大。き。繫。見。

義隆が基盤あじわらの上に。槐姫えいひも。嫁まわらで安泰あんたいの坐すわる。や婦人のふみとそ。祇ぎを脱ぬぐひゆふと。路頭ろとうよ流落りうらくへゆきまくらん。娘むすめ四よつアキリのひし。才陶五郎さいとうごろうの養父ようぶよおこし。君きみを敵おのせらるのうす。とおどり。されも又またひりとす。さうば夜よを日ひ小経ちうけいしむ。彼地かれちへきくだり。槐姫えいひの先途せんとを放ほひをもらひ。づれの日ひより忠義ちゆうぎを竭つくさん。とく支さゆゆ。羊ひつねせひ只ただ食くふ。初花はつはなを扶掖ほえきし。かがくとひ焦躁じょうさいとも途途ととる。旗はたされば。女めのの歩あるくと。十月の上旬じょうきん辛からくと備後びごと安藝あきの封疆ほうきょうある。三原みはらのをよ未みより。とくとく前まへみ陶とうが蠶威りつゐ小雋こひん後ごとくとく。活はきの本ほんよ新聞しんぶんを居ゐ貴賤きせんをひかど。元男もんよたらり。陶とうが郎黨らうとうを遍へんす。国防牌ぼうこうばい画ゑくと。山口さんくの宋地そうちへ入いるとを許きす。うすえよ。活はきの本ほんよ新聞しんぶんを居ゐ貴賤きせんをひかど。元男もんよたらり。えれど。僅すこよ尼法師にほし。その仙体せんたいを脱ぬぐ。女子めのの五十以上ごじゆうじゆうのものへ入いるを許きす。と歩あるくを許きす。とくとく周防すいわの山口さんくへ。五日路じゆよ是これらねども。羊ひつね七夫しちふ婦ふの園そののどと。小柳苗こやなみせられ。りくふともせんせんと。さよひまき木契ききを立たてた。容易うなづき園そのを越こらること。二里ふたさとう五里ごさとの程さとあらぬ。ひとう初はじ元もとをえだ。山口さんくへ遣おとし。存うそや亡うそやも定さだまらぬ。力治ぢゆう同樹どうじゆを訪たずせざれ。羊ひつねせひ公こうすもあらう。活はきの本ほん郷ごう小猿こざる寝ねをあまう。然しかだ。園そのの戸との用もちをのそ。今いまう程ほどよ。今いま茲こゝよじゆく。幕まく。天文てん文二十一年じゅういちねんより。世よ春はるうら猿さるす。あれび憂うを慰なぐすも。うろうろ。馬燥ばさうあぐら。後あと立たつつても。竹圓たけわんへべにまよふ。思おもふ。さよあと。六ヶ月ろくげつよ及びて。奇きも殊こと生うの中なかうようつ。らふ。うづ費ひを首くびなれば。玉枕ぎょくしん御ご前の賜たま。十枚じゅうまいの白銀しらぎんまく路費じゆかね。うづまき。一いつ月つきの旅宿りゆくしゆをだ。一いつ月つきも餓うなづたるのみある。あらど。うすら

残すすきよからぬ。今十日もやてやらばを食す。外へ出まつじ。と
おばかはるさうもす。おまうにぢひりて。有一日半七。初花を
併ひつ街頭へ出る。闇づれの日より角びと入海よ向び。二月の十旬
みひらうべどりもあ。或ハ何の用と定ひば。今若いかであ
るひとひ浩然。痘癬の痕きとひく。その顔ひと爛きあざれる
女僧。券縁の内よき食もる。やめらん背より絶代の髪を負ひて。す
弥陀の仏名を唱頗又錫杖をつむ鳴らつ。二原のゆきうり未小
希。そが後方よられもある。やめらる女僧の顔。前あるうりの唇
醜くうりた。ありうる過世する。やめの疱瘡神よ憎むたり。と
怪しく。生憎の入もえうる可うる。後の上より三歳。四歳。うる
稚兒をうれ棄じる。共よ念佛。因のうへゆく移ふ。未く半七

夫婦をうんづる。前ある女僧よきうつた。何よりせらん私語り。半七
今うの兩人の女僧をえう。初花よひゆ。去年の妹。浪速よ寝寢
あくる。法善寺ある。千日墓へ詣る。祖母へ手向をもせぐ。方平
作が苦提をも修んとおひつ。只嘗よひそがりに折りしき。
おぞくこゝまで来られど。仮の道よひきほ疎わ。金のもあか
路費も竭る。物がよれん好事。とえさらね。彼尼達を喰びくへ
布施せんや。とおひ初花荅す。つまらへもあらむりひ作り。とく返ぬめ
ゆくとひゆ。半七は邊へく。二友どうもきり出る。じやくと拓かす。
腰小著たる錢一縒を。件の女僧よ取らし。去年の九月三日アリ身
ありまつらりのあ。それがや。面向して。とおひ。両人の女僧がひそ
りおともよ錫揮鳴らしは。弥陀經一篇を誦訖。とおそ半七夫婦



小のす。えもれどとよたよも。菩提の道よ志あふ。とあ
やくわれ。やらのへとおえゆへゆ。何處より坐すと向半七ゆて。観
のまへと宣むる如ぐ。去年の九月浪速より。俄頃よりひそむとあり。周防の
山口へ赴くりのうるが。この新聞小折苗せざられ。さくばらよ春を迎へ
路費も今ハ竭んとぞれども。ひくびをうけしもやうど。ありよ尼山前
たち。常よこの閑を越あかうべ。倘国防牌面うんどうの物を齋く
めのを。錢よ代てあらうべ。夫婦が离れた旅衣を沽却くも買取るべ。人
を放へば即佛慈悲の菩提の本うるよ。と初花りろくも掌を含むて
隣うべ憑む樹のり。小涙の雨ひやづ漏玉す。外の烏滴よ墨染のそぞ
ねじつ。兩人の女僧はうち兵頭のを想せば。且つ先達の女僧目を
伏ひ。寔小長尺縫のそぞりよ。路費の竭らざる。せざるのり
やうト。特小婦女子を椎乃あべ。下トは痛く。いぢりか。あれ
とも。人ふ貸貰べに牌鬼ハリ。ほの閑四月のち。あよ至らば。必定用と
すをすて。行く。今あらう行せあへり。と信手ふ思え。夫婦ひよ
のを失ひ。又ひよもすく。羊七惱める顎を折。宣へ所さうと
き。さるを携ひて。かく。猿路よ呻吟へ。仇うるきよ跡を埋め。玉まく
きるのうん。とらはまんへかよ。されある女よひよ。妻あるが。主の
お親のおふ物を索て。かよ。周防へ赴んとぞ。彼地の擾乱よ便り
。百七八十日を空く。暮せば。うからと一チ日たりとも。千葉の秋を
かう。さるが如し。明白よ。告げ。かよ。さを猜へ。あひて。善巧よ。便有
うらば。あるのね。やうじよ。閑を。うちも遊まく。ゆうれ。と只。僧馴
かれ。先達の女僧且く沈吟し。よもよも在するよ。猜うよ。い

の多く痛し。貸した牌児はそれども。さよ一條の方便作りとてそ
ぞく。み同宿が負たる男見るをき。幼稚あれどもその員より
村長より請ひる。閑防牌面一枚あり。うち歎きが黙止がされば
をきるきりのを。後の中よ鱗一入れ。さもやからうらう。此
関を越えられん。りん身も関た小越あり。閑防牌面を返
しゆいね。せよ坊よ人を放へ出家の行狀。りん身うろ苦くる。
且く後の中かへまく。関のゆうこへ過るまよ。泣もする。音をも
さむ。よくうろおと教諭。頬子稚児を抱えあひつ。
りぬが後の中へ躲へ。と頤陀囊と一枚の牌児をぬく。これを
十七小遍典。吾脩の源多川の東村よ。とりて草庵を締す。
ひと毎日小三原吉浦の縣へ上る。も食し仕事のうり。源多川

の南す。捨華庵と索あひ。かくれゆじとりよ。半七初花を
感涙を拭ひゆ。宴坐の慈悲善根をさうた身の後もひづ下
忌みん。関たよ遇つゆ。牌児を返し進らとべり。と夫婦雛
うちうらびを述天のも升るひ持つ。欣悦面み見ゆ。先達乃
女僧られをえそ。りう共すら微笑ミ嚮ふ。周防の山口へと
まえあひ。が山口との索て。廣な城やうる。容易うきあれ
がく。りうる人をう訪せゆ。ひとめがつるく。うきとく
羊七答す。外祖が由縁のりのうれど二十餘年中絶たどり。そ
吾脩へ只名を字たらの。精きみのちるうもゆく。舊
好をう當よやく。方の刀冶同樹といひりのよひ。といひ
すれば女僧ゆ。うち点頭件の同樹といひ。去年の冬

延化ノゆひし。とが括義庵の先住のゆ。舊縁ある人うるをど。吾脩も粗うれをまよ。それハ山に在らば。天神山のあゆ。氷上の御となづゆ。彼人整七十よりまれども。うは健うる。慥よすとけむ。日もとや暮うんとぞれべ退るべし。闇の襖を引たゞられぬあふ。とくへ越あく。といひうけ。撓じよ蓑を脊負あず。同宿の女僧りうせ。遠くへ走り去へ。年をも初夜も。黄泉よ佛よゆるが如く。あそび一背影をう。殊々。おほ旅宿よきうつて。物よくとく。娶め。主人よ別を告げ。又叶く。走り出る。件の牌児をりく。障るともすく闇を過じ。にまく。吻と息をつな。直よ宿多川の上をと。彼首此首と索ね。小括義とくの宿へ続く。日も既よ暮かし。せんもぐろく。とまひ。夜よ
ま中のひ及み。四日市といふ驛路をひよれて宿を求む。夫婦彼女僧が
みをうち相詰つ。ギヒグのゆ。初花へ幼稚。玉枕御前よ絵ゆ。宅
ある日のるしう。怪の平太郎が面影の認ぬ。うべ。ワの尼法師が
負だる稚児。平太郎によく似る。このもの。がひの迷ひ。ちらねど。體
説うらち。草葦を索めて。ふうも不ふ譏うらぎ。どく。初花ゆて宣ふ所
さもうす。彼尼。刀袂達の顔。丁そと。かどく。しり。声。ふう。何とせん。
文熟たら人の如し。どうよこれ。日未念である。辨財天女。の化現。と。聞矣。
越ふを。ゆひりん。と。尊も。有べた。利益小手。と。称賀す。が。半。有。壁。心地
曉く。遂よ再び女僧の葦を索む。宿をうそねると立肯め。す。
周防圓佐波郡。山口鶴峯の城下。遙く。うる。氷上の。今
あんつ。カ治同樹が宿所を訪て。舊縁の縁を。再び。小と見明い。

ま婦がうと告よけまべ。同樹へゆく事にて貪家は舍焉。

昌の夏の花乃上

刀治同樹がる。第二の巻。冬因の晚稿と頷せ。條下。全みが娘母
晚稿が昔物よりみて。祖その名々喫えども。つまごの奉ま詳よ
せど。原の同樹とひかり。近江の觀音寺の城下。刀拭が家よ
年來つて。大きき業紙によろ。あるに京の刀拭同樹とひかりの
紙あらう。ひりけられ女児ひとうあひ。同樹が後家。年齢三十をう
のうひじく。媒妁ありて。今うの同樹に入まとく。さて刀治の名蹟を
すえども。この室町家の威や。小衰て。京も固會。年毎ふ
荒やす。四民かのく活業のうれと失ふと云々。これようて。今うの
同樹が時せよ至りて。産業衰微して。どうづく昔ふ似づくも

あらねど。華清よ舊き刀拭されば。僅よその餘波とて。園宅五七
口と餉ふ足。こ死りて女児増穂み。自相子の男舞う。ど
習て。笠屋小夏といふ。傳手。ゆくうたる。こその母の情意充
あらば。遂又同樹へ生才さしく。ひと愁ふたりのうし。女児増穂
狂舞と習。とて元奢よ生。育て。果も。善後の。辯。紳よ。給る
さ。妻側室ともほして。ちの生涯を安樂よもぐさん。と校計行ふ
増穂ハ大和統井殿の近臣。今市全ハとゞ。壯俊と。假初のそひ臣
せー。う。忽だ。よ有。て。男児を産。よけど。ばくう全八。犯せる
科。ゆくて。大和を追放せられ。世よ。養う。児と。うふう。忍。を
立。增穂ハ。こま。死。憂。よ。うひ。不。そ。う。つ。竟。よ。む。そ。く。う。
されど。同樹が妻小田井が為。骨肉の初孫。されば。いよ。く。不。役の

力のよろひて。浪速トテ。乳母とて娘ひよしくて。學むる程よ。同樹へ
続井殿よりきて。平城へ赴き。國流明阳の宝刀と拭せられ。うふ。
懇く抵み打當門の大刀の刃を毀みれ。云怪うざる哉。云うれば。
重き科被きぐりふ。続井の執柄蟻ね曲ハ膳ケ前妻と。同樹が
妻と従弟女あり。云由縁をりて。譴責の沙汰よ及び。悪き
京へゆつて。ぬれども。さるゑせらのきれべ。年來世事と接操く。
脱毛乞ひ。死債乞ひ。え本私とあるものあらねど。累の傍落と
遙きよどり。久きば。卒然ふて。よきに面目と失ひる。阿容ミと
あふて活業あらまーとて。おのづ不寧といひふじ。孫々棄妻を
がま。娘々を。善治と遂電。けこう大内家繁昌。山口鶴峯の
派下を九條よひ。う。その熱闘。遙くよへまやまされ矣。

同樹豫て。ゆくは。周防の山口へ赴き。よけきど。させんを。猿ゆ
きりきび物と。か。や。一。鶴峯の城下み。住宅とりとめ。つゝや
わ。り。けん。山口へ遠く。ぬ。水上とり。御。よ。く。と。も。う。れ。店と。往。送。ひ。
く。ふ。そ。て。焦。よ。る。み。精。よ。る。薄。そ。ん。ど。と。賣。む。一。買。む。と。せ。と。海。よ。
す。性。究。て。腹。き。く。る。だ。り。の。う。れ。バ。利。慾。よ。き。く。て。人。と。欺。き。焦
す。る。刃。と。く。拭。あ。ら。く。て。價。貴。く。賣。と。あ。ぐ。く。る。バ。妻。の。小。田。井。ハ
こ。れ。と。傍。痛。こ。と。よ。ち。ひ。て。言。榮。紙。竭。一。諒。よ。り。れ。ど。同。樹。ハ。萬。よ
う。付。そ。入。ま。ふ。そ。の。家。と。続。ハ。十。又。二。ハ。妻。み。物。と
い。が。一。され。今。既。よ。遠。く。周。防。の。水。上。へ。來。く。更。よ。世。の。經。営。を。と
き。れ。ば。う。づ。あ。の。が。す。ふ。拳。動。て。絶。て。一。言。も。小。田。井。が。諒。と。聽。ぞ
そ。し。て。又。十。年。あ。ま。り。と。行。る。往。よ。同。樹。ハ。す。く。貪。婪。の。あ。病。

あく。からぬ所のものとせうぐ。小國井の身を形りてふみも。
世の務よ羈きて。ひふもあらぬ支とゆき林よればこそ。家を失ひ
孫紙棄て。あらね里よ呻吟す。さればひとうある女めと生じて。
只ひとうかる孫紙棄て。つむまの僻車と諫うて。歎の中み
死すく。後の世つと罪あし。佛の道よ入さんふか。と一そぞらよ
そひ決て。良人同樹よ身の暇と乞受。忽地よ女僧となづく。
安藝國高宮郡。小田川の上よ草菴と締びつ。十年あまり行ひ
とす。はこう行脚の女僧兩人。括華と号す。微笑とゆきが。小田井
比丘尼の草菴よ同宿してあり。迺菴主の遺言よす。

括華比丘尼舊草よ恵おして。更よ括華菴と号す。先代の女僧が
形見の送物を。三ね悲。国防の水上へ遣す。舊まうれば。あれと
同樹よし。今茲同樹ハ七十餘年よゑども。筋骨逞くにて。
社年よ異る。一年のほとど。もとて。慾みて張つめられ。舊妻が
物故。死ぬとども。涙一滴落さず。種々の形見と獲て。俄頃よ
得た。と詰びつ。日本嗜る酒よ代て。づく程のるく喫渴し。
年もくまで長閑する。春ふあく。殊のうけとば。の母うち龜うて
あい。けよ。ひもかけ。三月廿一日の寒宵よ。大和國続井家乃
らうふん。あねをいた
退糧人赤根半七といふ壯俊。その妻をわざと索まう。精く彼女婦が
うを問ふ。ま七が妻初元へむ。同樹がこよるに恩と受ける。蟻松
曲膳が孫女みて。ま七も又血縁よそあらぬ。曲膳が孫見る。その
りふ不紛ふべくむじよ。舊縁といひ。舊因といひ。脇道よ通す

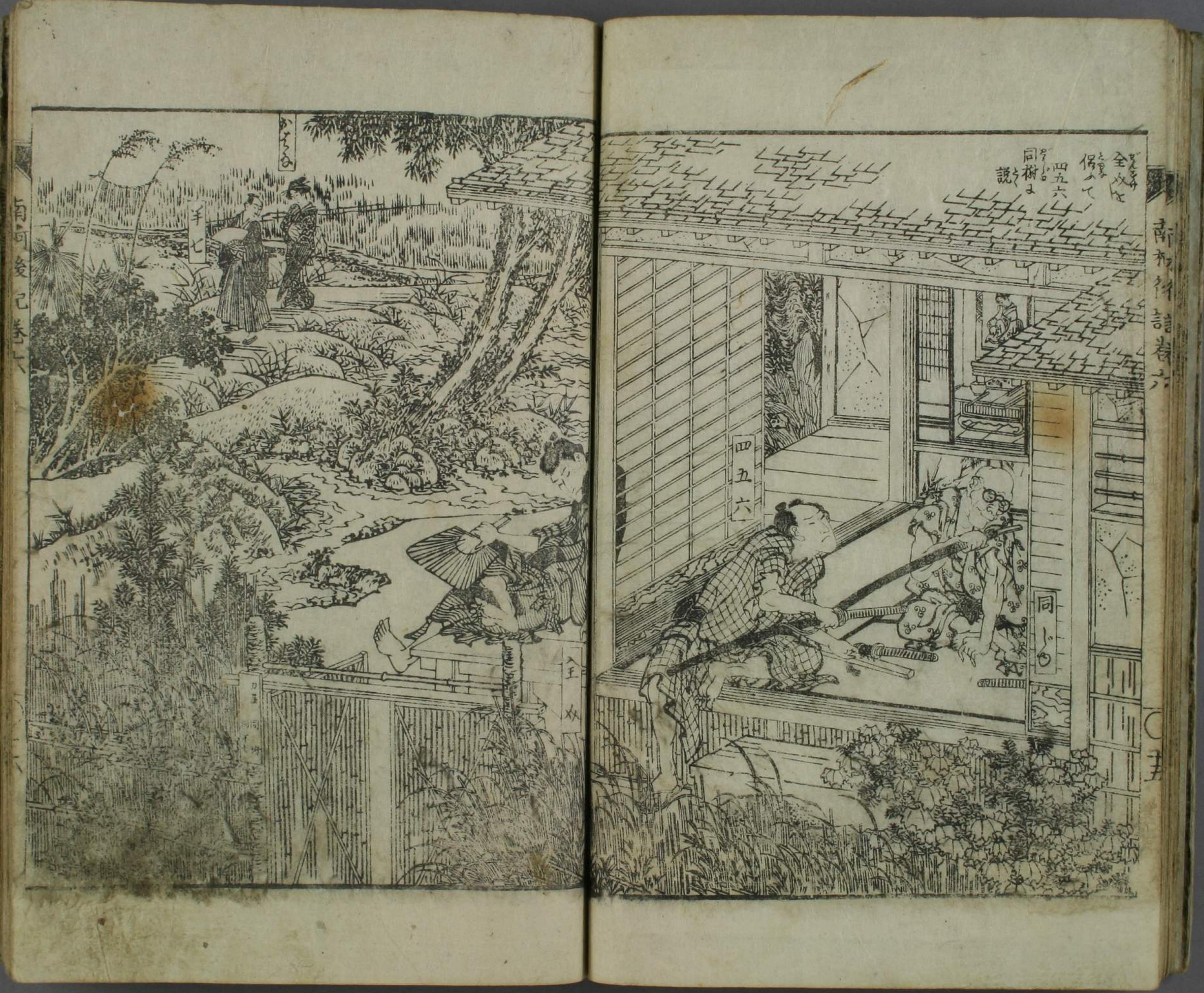
うりと。同樹へえま信よは。義小勇むりのやあ。ねば。二れとの
友と懇意せねど。只初花が容止。うもくよ優きて。いと難堪る。
えて。肚裏竊よ較計る。わき。一派。みもなづ。信すふ歎待す。
この日より件の主婦を止め。殷懃に勧り慰めけり。あれども
す七年。かう貪家の食客となりて。うそともなく月日を送る。
ひつねみに不考ありとそ。まへ刀と拭玉をひ。或へ同樹よ代下そ。
村長縣正の第宅をうちめぐる。妻の火を打。あを汲み。或へ人の
為よ。ふうたる衣ととれ洗ひる。同樹へ結句承ひとうほ
時より。世紙安くらひうがら。這奴ホハ。つら肚裏をだき。で。ね苗の
棟より。すで。うよとんとてや。汗水を流して。挣アこそ。究う
向徒さん。給銀とりふりの取ぬ。うれ。小廁と炊妻と娘。うけ。と
竊よあざ笑ふと。は七主婦なり。あぐ。同樹が憑。一
るみ安堵て。春と暮。夏と遅。雷鳴月の炎暑堪がる。す
物とせど。あら。活業。身とあづね。刀と拭玉。僅四五
月の手練。されば同樹よ。芳ある。四方の元主をうち巡る。
刀劍と近他。この。の。注文。と。うけ。まつて。その性情。物。杜伎
されば。同樹。あ。傍見。とて。人を。あ。紙。稱美。と。は七主とぞ
よび。からし程よ。せ。ひ。日本。同樹が。云。と。疑ひて。あく。ゆ
あくる。緑由を告げ。彼が。つ。信す。お。款待。と。て。う。や。と
匿。今。同樹。相。陪。風流士の宝刀と索。を。や。と。おり。ひ。と
有。ひ。ひ。同樹。相。陪。風流士の宝刀と索。を。や。と。ま。り。と
う。共。よ。力。を。裁。と。て。彼

宝刀を索牛し。某之婦と忠孝の人にとすくありまじ。ちのま
さうび後跡日もあぐべ。厚く報ひて生涯を安らゆる。進ら
せんとて。叮嚀よ相倍一ぐ。同樹坐て。これよれとこそあれ。とぞうよ
ふく詫びる。耳と側そ。眉と額算め。原木和殿の忠孝の人
え。妻女へ貞操の婦。これけよで。ほする情のす。のうくて。
後くづくもの爲共み呻吟つ。このうすうすで。迷ひ未身ひぬ。と
のうかひよ。人をもぐる僻図あり。つまざせゆめど。大内家の
あくすくむ教きゆひ。彼風流士とくろみ起も。去京の
如月半やあく。鶴峯の侍所侍。一口の大刀を捨ひ。かつとを
大内殿よ献ア。くる人あく。あくさん続井家の重宝。くる。
風流士の大刀。とやくせつべ。着陸。かく放びゆひて。墨暴。陶殿よ
賜。陶殿女の大刀を返す。進せよ。陰陽一對とく。秘斎。あく。
と仰せよ。陶殿。年來の威勢と。のみてうけ。その風流士
とも。あく。賜せ。陰陽一對とく。秘斎。あく。あく。
主従不和。よろしく。大内殿滅亡。防長豊筑。四個國の中
る。有像無像。猫も枚子も。達の上の野牙。や。主は陶殿の
物。とくねば。件の大刀。殊更。晴賢。秘斎。あく。よ。の里人。おも
をく。よめ。が。彼宝刀。つよ。欲と。あり。とも。七世の玄孫。い
ゆ。す。取も。る。が。不。行。る。が。ら。つ。く。物。を。案。し。れ。よ。又。う。と
る。れ。す。も。あ。く。が。灰。つ。か。と。う。ね。べ。陶殿の郎君。かん。お。が。才。あり。今
既。よ。親胞兄弟。東西。よ。引。う。れて。讐敵の。う。ひ。と。う。そ。と。も。因縁の
情。う。そ。の。中。よ。こ。う。と。ざ。ん。と。う。ス。お。の。れ。の。く。ま。二十。餘。年。乃

春秋と経ゝれ。鶴峯の侍所を負ふ。まことに。元被の
便宜よつて。さう。陶器の清内。某甲。某乙と。笑え。方を。
和殿を立てる。どもかくも。からめて。試ん。どう。それよつた。
今の形勢。あらゆる。が。假よ同樹が養ふと。被廢。一刀流の
家名を相続。さて。鶴峯へ。おでやく。みどり。うめ。うぶ。うんや。
と信。からて。鏡示せ。また。夫婦。坐よ。感涙。おひい。む。お鹽郎。
残恩の養ふよ。浮雲の富貴。樂す。ひとも。そろへ。死の
うれば。馳遇。しげ。さて。只。こがく。さざく。匂て。物。くぐら。ても。ひね。
仰よ。すん。宣。す。圓辞。ゆ。と。廢。され。同樹へ。ゆ。あ。ど。大。小。
飲ひ。奉月十六日。嘉祥日。良辰。この日。さう。養。ふ。成。乃。
披。あ。ま。ぐ。け。と。と。薦て。え。用意。し。と。奉月。よ。あ。う。く。ぶ。
莊役。某甲。相譚て。御導。と。は。せ。み。袴。と。穿。せ。羽織。と。被。せ。
朝。うつ。と。生。して。御の戸を。殊。あく。うち。巡。せ。け。う。これは
うつて。初。若。も。その。ゑ。あ。う。に。物。く。と。同。樹。僅。よ。初。の。家。を
除。て。ち。若。と。ゆ。べ。こ。と。さ。十五。日。の。甲。後。の。間。よ。彼。莊役。が。女。房。を
御道。す。と。そ。近。所。合。壁。へ。相。識。の。為。よ。遣。く。う。か。り。じ。う。が。お。花。ふ。
奉月。須。守。の。神。社。へ。來。請。と。外。末。の。う。祈。ら。ん。と。そ。午。下。宅。を
出。する。ふ。これ。ま。い。ま。ご。ぬ。ご。ば。う。け。

日暮の夏の花乃下

かくて。同樹へ。独。を。宿。へ。殊。更。日。よ。ま。と。な。よ。賀。び。紙。お。う。こ。と。と。
猪。め。の。近。辺。の。甲。こ。と。り。く。迎。へ。つ。お。よ。挨。拶。も。う。往。よ。夏。乃。
夕。も。や。ち。と。う。て。午。時。の。炎。暑。へ。と。う。せ。ご。雨。ト。墨。る。勞。ハ。失。せ。ど。



今へ訪来る人あり。りでや持葉よ充つけ。独乐せんとひくう
ごら。棚より陶器よりあ修せが。忽地芬と酒の香より。眼と
細し。涎を流し。蚊や火葬より炭火に起して。陶の尻と灰と堀埋小頭と
碩け指と僕。ひとり笑て。点火おこう。あくる貢布の祇包と脊骨
する市人が假る。倭子の後毛とある紙つて。寝うそ。同樹が
門とある隣子とよすと掛。尾巻と。礎と。同樹へひく後毛と。
側んと。る背へひと突。ややふ膝立と。誰もらんと。ひく。
敗戦の四五六より。喉門もせで。老くる力の紙うち。翠ると。とある。
障子の骨と。鐵と。編ね。用圖よこうせよ。すくやく脚毛と。
既向と。障子の青で。閑あくまんと。忌みと。和郎と。あうけ。と
咳ば四五六より。肩こる。包と。毛ちして。頃うう。流汗と拭き。けふ。
炎暑ふ。門うそ。がん水がわと。よと。あら。鹿や。よ。晴よ。と。閑人。青
金体での。炎暑。唇。唇。坤へ。ゆき。う。移りて。脾撓肚と。閑人。ね。
うち。炎へ。がうち。笑ひ。四五六が。亦。あても。あると。やが。人の家の荒を
え。出へ。う。う。で。ね。根ど。よ。貸せが。造。借。も。と。づ。が。不。ら。うち
矣。正月の三つある年。足りよ。借。ま。と。ひ。り。候。闇の浦。ふ。そ。も。る
りの。全。ある。りの。へ。借。底。去年の二月大和。う。物と追ふて。多。も。
こく。來て。下。公案。西の都。と。ひ。り。て。を。と。大内家の城下。う。ん。ば。世
の。う。便。著。も。よ。う。う。と。それ。う。う。う。に。足。と。強。め。些。利。薄。も。出。多
や。出。木。ぞ。射。つ。砍。つ。大。合。錢。せ。ゆ。世。間。長。闇。く。う。う。と。の。一。外
瓢。子。ひ。う。で。や。一。外。け。の。う。敗。と。見。す。五。百。が。左。癡。で。松。刀。光
三。口。ま。ざ。げ。丁。後。の。後。家。鞆。へ。亭。主。の。好。る。赤。鞠。夜。食。の。菴。す。

あり難る。荒布ふ仰て敗下緒。予人有り。と祇。うう。ひとくよ
そ生せば。同樹へ改と在す。掉。龜木。う。廉牙の妻の敗。難疾。
秀芳。う。焦刃と五百穴。が良敗。といふて。歯莖へまく。也。猶
えられて。竊。う。とあごを笑へば。四五六。亦祇へ押て。もあら。が
こ豆。が納め。せん。が納。らぬ。が全み。が。五口。傳が。浪速。よ。在。一
日。よ。く。ま。り。死。友。と。も。うち。う。れ。ば。彼。も。ス。り。う。と。あ。ふ。ご。の。地。方。へ。來。て。も
り。で。李。緒。は。き。く。て。果。教。も。し。活。業。へ。え。せ。を。と。く。そ。む。徑。よ。水。上。の。ま。よ。
刀。冶。同。樹。と。り。人。の。あ。う。久。假。候。そ。れ。か。吾。傳。か。外。祖。父。み。く
と。へ。も。る。あ。ぐ。し。娘。母。の。遺。言。此。彼。り。う。て。孝。順。よ。養。よ。て。晚。年。を
乞。易。く。送。ト。一。欲。と。彼。が。情。愿。當。今。の。社。役。も。珍。れ。奇。特。り。
あ。ん。身。も。欲。び。あ。ん。と。ぞ。よ。て。墨。裏。よ。ね。て。未。れ。ば。ひ。の。外。よ。強。面。て。
尔後。よ。せ。ゆ。つ。け。れ。ぞ。下。物。夥。計。で。六。舟。の。市。ゆ。の。春。よ。ノ。中
絶。ぞ。面。を。あ。へ。そ。る。四。立。ち。が。面。よ。變。て。全。く。と。祖。孫。の。名。生。す。
か。ひ。ね。ど。り。せ。ゆ。ゆ。く。ぞ。改。と。掉。肉。縁。も。あ。り。ま。ど。も。む。う。ー。と
く。が。孫。で。も。あ。う。ん。が。彼。へ。え。未。養。す。子。生。且。貞。前。す。と。祖。又。祖。母。
禍。を。あ。セ。一。生。未。損。ひ。仇。人の。あ。と。ど。ひ。絶。て。襁。褓。の。中。よ。無。く。る。人。
今。更。ふ。生。未。も。用。す。特。よ。渠。奴。が。面。魂。へ。彼。猿。樂。の。紀。え。の。
太。郎。冠。者。め。た。て。何。如。す。が。一。節。駕。接。て。三。文。の。勧。至。と。あ。く。と。も
入。え。む。生。涯。鶯。實。殊。矛。者。と。て。人。よ。佛。と。わ。れ。て。か。の。辛。ん。世。れ
櫻。く。ど。さ。る。よ。う。て。そ。の。同。樹。齡。七。十。よ。あ。る。ま。で。仁。義。五。常。く。り。
と。と。算。盤。み。の。後。て。の。せ。ど。孫。養。よ。う。拘。の。五。畠。冷。飯。一。碗。食。て。
減。の。よ。う。と。ま。よ。う。と。煙。管。で。鼓。く。敗。席。薦。埃。す。づ。り。よ。い。が。ま。れ。す。

四五六騒ぐ。先きる。その手のとく。宜みる。一條彼全久。生るる
奸雄者。老實よん。毫油断す。馬市よ生る日。よく生薦の目とも
抜き。入寺余り。もろとれ。佛の道とも容易剝。と老功の外祖
さす。す。徒手のとくせする。迺へ。何より妙ある。ふ。さすとて至る。
とのが同樹も呆々。果は。笑ひ。棄て。よど。今。えん。ゆ。とじ。翌
伴ふて。まつ。とつひも果ぬよ。四五六も。衝と立て。外面へ。出つま
振け。前より。門迎え。立在る。全みか肩よ被つて。女拭取く腰ふ
まき。离歩よ内よ入て。同樹か向ひ。藤わそく。外祖。まみの。え立ちて。
けのす。でよせ。う。のね。燒。がす。け。老の僻眼旅よ在て。護脣。乃
あら。ち。そ。ひ。とう。か。り。と。灰。市。よ。出。て。の。匂。鳴。盜賊。よ。そ。乃。る。す。ね。下。よ。び。足。と。揚。る。と。な。
踵で巾着。と。切。づ。ぐ。人。よ。酒。と。買。む。と。た。の。尾。を。破。と。木。更。い。
能る恩相。固俗。頻。よ。鬚。を。う。撫。き。同樹。よ。く。感嘆。一。臂近
きれ。炭。圓。を。く。取。て。あ。ぎ。立。か。て。テ。そ。こ。が。孫。す。れ。よ。う。あ。ぐ。ら。
ま七。ま。婦。こ。よ。せ。れ。ば。こ。が。宿。み。の。苗。り。下。所。要。あ。と。ば。あ。す。こ
よ。り。お。と。と。そ。振。ん。と。と。が。四。五。六。小。膝。を。こ。と。め。つ。る。由。縁。あ。れ
く。あ。と。絆。ど。隣。在。猿。の。あ。う。う。ぐ。と。せ。よ。刀。宿。と。続。せ。ゆ。へ。く。房
ぬ。が。と。諸。よ。固。樹。へ。うち。や。う。笑。と。彼。へ。こ。が。故。妻。小。田。井。よ。遠。
縁。あ。い。よ。そ。二。み。春。よ。う。私。と。あ。け。しき。信。と。す。歎。待。と。ま。婦
養。子。の。搜。盡。と。る。も。同。樹。が。胸。よ。物。あ。る。友。し。そ。れ。と。寔。よ。と。も。う。君
こ。と。う。と。河。こう。ふ。後。諭。せ。金。か。握。ま。る。巻。を。捺。す。往。ま。七。へ。続。井。の
家。隸。よ。か。寔。又。の。仇。へ。る。半。進。が。す。る。よ。と。四。五。六。が。つ。る。も。う。君

養母の遺言然止ぐて。今すえ進と斬をとつども。彼も又仇人の半體。仇人の根を断て。策が根さんも只この時。再び沿んと。さる屋と名居るとも。祖入ざよ許しゆべ。立地は怨と復さん。あみ飲し。ところども。りくる煙管を丁と折。忿怒の面きさもこそ。と同樹へ小膝と礎と抱。仇人の子されば。七と斬りと。又理有理。その豫あらびつす。四五六へ圓腹中。今更匿ひ。うわあく。またお花がゆり。され如。此そのうあつとて。這奴木を肯く。作新ふ。そのと死四五六全々へ。小保の縣正より。賄すよ。お花を迎きじまふ。と傳りて。猿輿棄物昇り。とおよ。あうれど。お七へ。おひ日未欲と。お花を阿容と。えも遙よ。さじ。倘彼大刀ひと廻とあぶ四五六を。豫て一封の證文を懷中。とく。お花がゆり。よく相譚を。おとせ。年こそ九一と。つゝとも。六年。あり。すそ二十両。二五百金が物。ある。さて。日も暮て。初夜。て。こんな本セと。假りて。小保の縣正が宿所へ赴き。件の大刀を受と。んとりりんふと渠ゆ。従ふべ。里遠離る。天井山。夜の林ゆ。人跡絶。面よ川。あり。背よ巣。あり。全み。よ埋伏して。初の仇人と名告。うけ。只一刀。よ砍殺せよ。また既よ死する。とれ。彼ちをと。往遠。る。花街へ。售とも。後肚痛。も。四五六。も。うなづく。や。單りて。氣きよ曉。とれ。と。孔明。且よ。陰謀を。膝より。せ。傍團羽扇と。え。せ。

破き下す。全みをつどと。ちよく候てすく。防げ仇人の妻を
詐説て。阿艸の床よ立ともも。怨を復とこれその一。あくらふ
ゆくとす。もろさ。天神川の数畳。寝かわらうと待んが。
勢猛く。瘦とう。四五六も下めう。只魚の三可と。もりいわ。
同樹どのみへ食と。獲させ。全みへ仇人を。奪。次談食へ有れども。
吾偽が肚へ。縫て。瘤。辛苦。瘻うら定價して。ともや。もす。
けよどり。その汝は。よろぞ。腰。すらして。もと。さふ訴。元の毒
あがら老人よ。索。被てひよどり。とつよ。同樹へ目鼻とよせ。
手く四五六。四五六ど。吾偽よ女才あべ。秋。これかくとよせ。
あて。と握り。あふ袖。中。四五六。莞。示とうち笑うて。けの相場へ
賤け。もども。紫。かく。ね。されば。おたが。迎の走車よ。打。扮。
究。賣。る。真敗物の。刃。刀。三。腰。すぐ。諸食の。そよ。す。被
ゆく。と。直足。と。捐。耳。を。接。せ。あまく。活。説。よ。実。と。入。きて。缺。代。の
ゑ。小半合。を。蒸。酒。よ。も。る。ぞ。や。さふき。四五六。下戸。す。
物。う。あれ。と。身。と。起。家。廟。の。障。子。推。ひ。と。れて。孫。階。の。屋。す。の
夏。桃。子。三四。ね。わ。數。み。義。て。ゆ。と。元。る。而。ぐ。が。や。と。う。ざ。出。其。
五六七。冷。笑。ひ。百。金。の。前。祓。よ。毛。拂。三。祓。と。朝。三。暮。四。吉。拂。一。
宣。死。久。粗。く。と。推。逐。つ。頃。と。神。と。家。廟。の。裏。と。よ。覗。き。
全。み。彼。と。え。ゆ。ひ。私。遙。奈。婦。を。す。ひ。病。せ。清。水。寺。乃。老。
法。拂。が。草。葦。よ。異。る。と。で。持。拂。よ。代。と。る。美。人の。画。像。彼。へ。り。ま。
と。捐。せ。ぐ。全。み。も。又。笑。き。果。き。欲。と。ま。か。の。浮。世。と。い。ど。これ。

天めりとく。宗主者へ行ひ。と低語す。同樹煙官と名ふとく。
さればとよこの画像より縁起あり。安達ゆめつらん。ま家の秋
大内殿儀頃。よ聲きすひとく。義基の北の臺。櫻姫の徑方
定く。あづべ。或へ猛火の中よ入て死すと。も聞え。或へお通じう。又
女房が冊きて。幸く脱き去まふともり。さおようて陶殿安
かべ。只言てや。娘の肖像を夥画せて。縁因居中。残る隈
解釈し。この画像よ仰す。女すあづべ。攝捕て進みせよ。賞錢
ひ色よよびとて。あらうとへり戸毎。彼画像をもりせし。
去家の冬のそとめうし。あづるに役ませま婦かくすて。娘乃
画像と見て。決と席。主の娘。尹よぞへしるとて。被りて表装。
かく。家畜へねて。日々。額と著。餅果のひとと供す。角清
らども。此方よみれ。檢計あれば。そと隨ひて。諸の間。との様子。
ま七が。彼首の画幅へ供物。全みよ。號て。彼画像よ仰す。女を。
櫻姫と見る。すくべ。引捕へて。物せよ。拵不バ損のゆゑ。世間縁起
あは件の如。と説示せば。全みへ。四五歩を。うそ。彼もこれ。名の
夢け。よう。糺改りて。祖翁。よと。習ひ。濡りで。粟飯。とる如く。
よと。夏。かね。す。やせん。どしげ四五步うち。良隣。へじ。うれ。これ
すれ。死でも。令下のある。もの。す。が。那里。う。友。室の。ふ。むと。空て
諸らん。う。戯房入じて。す。七。お。若。が。ゆ。ま。こ。多。再び。も。よ。と。て
傳の。被。色。の。端。う。ひ。う。て。脊。圓。う。全。み。り。う。と。も。立。あ。ぐ。ね。ば。同。樹。へ
外。面。うち。仰。ま。そ。門。の。棟。よ。日。新。が。屋。ま。が。申。時。う。狂。ゆ。ほ。これ
を。市。の。六。舞。每。よ。四。五。あと。出。會。ど。も。ソ。リ。ち。づ。て。す。七。も。お。花。の。

つまご四入らと全みと認と候ど。口うり物とく腰とれ。全
うせよ。とひつすや身を起し。裙と陶器とる倒せ。にう
酒と吐き。寝と枯ゆ。と憊せ。忙起て。ひとり腹立眼を
睡り。あふられあがら思へた。裙の故にして。間冷と席萬の
野郎よ飲。物薄るや。と嘆き。温き酒と持へ際。冗天賓
塗つて。四入が全みと目と付て。冷笑ひ。熟柿よ。仰る天賓
酒と法が法なり。抜りん。供饗の柿子へ。墜ども。豊ハ熟柿と
賞翫せん。づきと。と生ま。瞬く。櫛ハ三尺口。武人。すの精刀
扇。するすに身とひ移る。人喰馬も七首や。さばか同樹。孫きれ
小ぢりか。とげて全みも。つそぐへ。げふ歎け。活死みます。墓
禪の厚羽織。土用。あび。よあれ人のよだ衣。あとねども。隣
戸。きうちめぐつて。かく。妻。一。をう道。二。とら。立の宿泊。夜
町。すれぬ。背。徳。孺子のぬめりに因をする。と。毎。あす。か花
り。共。う。あ。ま。セ。只。今。さ。ふ。う。と。門。内。入。下。同樹
え。う。そ。鞭。や。ふ。う。笑。ま。ま。七。欲。を。や。う。じ。お。花。も。共。よ。ゆ。う。ま。
宿。よ。居。よ。懐。が。だ。よ。暑。有。の。さ。と。と。ひ。や。る。ま。セ。ま。羽。織。も
懶。子。も。脱。捨。て。衆。も。の。か。花。も。浴。衣。と。股。更。よ。と。信。す。よ。慰。ば
り。よ。か。宿。よ。居。と。の。格。別。か。途。よ。出。と。因。よ。以。と。お。ひ。の。外。イ
凌。ぎ。易。い。嘯。お。花。既。已。が。ま。の。宣。不。ぞ。く。片。道。ハ。薦。も。り。で。來。て
金。も。荷。よ。る。用。の。廉。と。前。の。月。よ。り。兩。氣。へ。す。り。き。と。重。族。の
た。ね。へ。田。舍。の。一。得。鎮。守。の。社。の。賽。天。神。山。の。こ。も。と。ま。わ。よ。く。
ま。七。ど。よ。か。た。あ。よ。て。か。経。と。も。ふ。や。け。し。よ。日。ハ。ほ。か。れ。ど。ど。

つくて却歩へ果毅也。まことに従ひよけんとづべ同樹へ
うち石笑え。つれ支帰のうちつれ立て。世の務を保難やら。
たまくのうまれば歩ちるもぬ後だ。湯と沸してゆきとを
汗流せんとろひふ。らひーのみで年老のわ履ふひうみれば。
齒守もるのみ描かれる。それのまくらべ飲一こと。まく
良きとぞ。穢雜てそらうち瞻仰てねどりとひく肩と
簾玉がす。七日死ぬやもゆゑ。それ何うのゆ。云者く
さんもとぞ。親と喪を失。老人のあらひをもばが不むま
る。假塗あぐら刀治の家跡と冒をも不る。まく
匿じよ只かくと。告むもあほしてかひ種と。今も信の妻の終と。
商人のえも疎みて。物の要みとゞもあん。舊に由縁を
忘まく。良人の索る彼昌と。アレ徳んとそのおひい放さ
ざん脱きぬ負債や。アリヤリをアリの債務ありとも。ま
どよううら住ん。まめ劬勞まめひそ。とま婦有うたう。
ひ慰まび嘆息し。年弱あくちやする。親切又祥まれて。胸
苦こも又一倍仰ぎ。匿んぬま。おん牙ま婦が糸紙口も。風流士
の宝刀のう。いぬ日を下りて喫トト。ご多ぐよろ思せ。小
小保の縣正。陶穀ふ由縁ありて不便のりのせられ。富田
鶴峯へも常ふ来りておまよ。おじ承りのあるに。これ又
彼人の蔭を蒙ることあり。りこの條の顛末と縣正ふ密
語りて歎きる。没せまことりや。とろひふ。つまむ和殿等
みるを称ども。ぞくく彼处へ赴き。こそもぐふくらふ。まうふ

陶殿も既に四個國の主ふありて不足きありとど。内室近ご
るくはりまひつ。側室嬖妾妻妾わいせきのうち。是をとむよ稱ひ
きふ力のゆゑ。汝が娘子むすめセシ妻めとやんへ。傳稀うる義人
うす。と喰侍くきし。彼かれを進すすせり。萬まん一いつまま七しち年ねん遠とほ
宣のぶひきよ。あぐきみあぐきみとくらべれ給たまど。之のば弥勒みろくのせせややど。
國流士こくりゅうしの太刀おだへ返かへす。敵てきとりづぎらひおりぬ。又婦めの中なかを
裂さくでん成ならど。又変易へんえきんへりと易かわし。まま七しちおお元げんごくろごくろのあくあくなど。
うけ引ひきよもくとあび。と口くちを胸むねひくらひくらよらよらひけて。仰あおけりあけりり。
ゆひぬ。主あるおもて女めよゆゆども。ここままぐうぐうふふ。亦またニ二り二ゐゐたた僕ぼく倅せすす。すす。
お花おはながとく。ともかくかくして進すすみみど。只ただ彼かれ宝刀ほうとうを隠かざすすと。あく。すす。
在あらねねば。國字こくじ憑まつむむきよよのうりうりよよど。物ものりりぬぬ身みの後の易やす
よう。猛おのよ使つかううて。ぞくくとと見みといいそそががささる。和殿わどんを婦めの家いえ
まま門もんの戸と鎖さずと。彼かれ使つか者しゃよ。うちうちつつとともともして小こ侯こうへあられ。廢あつて
周しゆ室しつよ招まわせせれ。縁えり正ただの宣のぶすす。汝なが歎かなききにによよを。
陶殿とうでんよ愛あええあべ。ふふ件くだんの太刀おだへ。陰陽いんよう二口にぐちの名物めいぶつ。殊文ことぶ。祕文ひぶ。珍文ぢぶ。
ももりりががいいそそははともとも。おおづづききのよよああむむ行ゆ。義人ぎじんと
りりて換かわんと。すすききせせ。ここもも又また然ぜん止ど。こことと深ふか窓まどの開あけけ達たつを
もうもうここどど。市中いちちゆう國流こくりゅうの女めを愛あむ。汝ながすすくく次つの女めをを。
そその趨ゆきくく口くが意いよよ稱めい。ああづづくく滑なめら。彼かれ是これととやんやんとと進すすせせ。ああづづくく大お刀おとををえて賜まつす。と仰あおううた。ううそそを花はなををが正ただが女め聞きふふてて聞きす。

まもあせんよ。その准儀をせよ。このおまよ密山やう。御車兩人
をさうきて添て。竹輿りて迎とまふ。このとりん為よ汝とらう
みとくろを乃よし。と宣ひをもに。下さびへおひ。下さびも寝。言
うりくをゆり。和殿主婦を待て。忽卒よ説く。と叱る。其
れもまくねども。彼宝刀をよそり復さば。亦せんをぶもあくばす。
室よ長乐のゆき。一ツをぬねまバ一と失ふ。史婦がくろうを
推量え。只涙のま先うと。づひく背向よ伏沈え。圓見る目と
掲示て。乞若れありうちられば。ませお花へ目をはし。塞る胸と
岡く眉。づきをうと決うねて。又つともあじしが。お花を袖よ
便を找ひ。操と破り。死を忍び。かのがざゑへ氣をそぞ。づく宝刀と
どうも獲ん。ごとくを覺かれて。とづひくも又目と找へば。ま七
類ふ嘆息し。とや獲くを宝刀を獲て。底々へゆき目へあひよ。
反逆の首領よ。陶晴賢。婢妻よ。妻を賣て。おん守が峯。
曾太郎。底々塵未ま。絶て面をあくせがく。義理を辨へ
恥辱をありひ。人よよりてこそ。口汚と呪じてひもあれ。
このとくのうけ。とづき。とづきをお見き喜と。もづれぬうぢよ
形るだ。牙のゆくとまかへかへだらう。巣立べ爲る谷水も。堰とめ
のね。袖の兩今。で賣る。矛の迎の竹輿。も。翌の日まみ
玉の輿。死んと。うひ決り。涙を禁て。莞尔とうち笑。ひひひ莞
と宣ふ。牙と。拂ひ。と。そ。恥みもあら。一旦。彼死へ年取。と。も。
病ひよ。懨。托不。うへ。おひ。と。ば。これうち飽きて。ぬぐふ。さでよ
みのほ。うき。槐姫。まけよ。も。おん往方定。うよ。私。む。世乃

因幡の虚言にて。鶴峯みて猛火よ燒き。むきくと
る。うなひけり。あるに獲て宝刀え。取てばへ生涯理本の。
せよ。歩く處よあひと。女とあはらひと。と後よ悔とも
きびとけん。とあとひまとろ。とまちくべ身を捨て。と
うしくへ激せば。またすく嘆息し。あくね里へ棄てゆ
遣てば。やくすでよおそそぐ。陶も身が養えゆふ。また七
羽の貧きよ。妻と貨ふ娘くる娘。と陶五郎よおと見え
ひとおとを乞訴焉うづら。かん手どよあういふを。又
推辞ざまふあづば。浮世よ苦悶八海の。此の集はの配下
仇人の側女とあると。過世つるる悪業みどん。賭徒すゑ
より。こよ到りてりへすでゆ。劬勞よ劬勞をうむに。累ひ
襟よ匱さへば。浮よ隙ひうづくよお死もよと泣流す。
胸ふ痞と押入の柱よそつて配もぬど。かくすつて黒べき
とて。同樹ひやをうちひと擣。哀れめ理うづら。別とつもほの犯
彼宝刀よふうり復さば。そもそもかくもくらへて。身と腹とへと
易し。ちや暮されば近の竹輿と齋とそんやあん。やよあん
凡草へ鬚をつりり。こよへ又痛い蚊ぞ。おりよ毎日目口をうづ
政とさす込む。おづ行燈を。と身を起とせ。またせども摧せど
脚力との薄うれなよ老ぬり。がりと浮雲し。ひで者御と
遠く。渡船ふううを爐火の差よお花の風と。とひくと
櫛置紙。涙りて解白衫も。泣う母坐と落化粧憂とく



のひくと母源天子乃
かまくと人をもとめ
あはれ上秋原の事
と廻葉已事、之に
玄同斧

つけの毛筋立今ぞ流もてやく水櫛よ。甚ひんのあくま色うた
おても。乱玉てわとおめ。折さくりて隣となり下しも小屋の二階不。誰
かをきみの三絃さんげん。外の良きとまびと。生憎妙めう唄うたを吹ふべ。

「ちる子と何なにあるの髪化粧かみけいじゆ。これらの櫛くしのちるる。

通りの夏の雨あめがこの咎とがる。

胸の煙けむりと蚊かき草くさ。この間あいだがまがひとうら
同樹どうじゅの縁えんと偏祖へんそ。おで火薺ひぢらの燃かうと。

敵たたかげばぞ滅め。易やすた人の命いのちの羽はをすくふ。

やべのやの黛つらも。房ふさの縁えんと戸と長ながよ。むもが
かの難面憎づらひくや。この間あいだがひとうら「み」や
口くちくねよ。癖へつて。ゆかごと油あぶと拭ぬぐふ



ちうもよ。物ものの指指と細ほそりに取とれ。身み。
佐多さとう四五六よろず。全ぜんとくうちよ。麻あさの袴はまの襟えり。と。縫ぬいいて
両りょう刀とうを。つけて。按あん。後方こうがよ。行ゆき輿こしを。打うちく。刀とうが門もんを。見み。而が
在宿すくせられ。縣正けんじやう。仰あと稟うけ。お花女郎おはなめらうを。迎むかえ。行ゆき輿こしを。あよ
齋さい。と。密ひそかよ。門もんべ。同樹どうじゅの縁えん。雁かりを。恭うやま。
經つら夜よ。と。密ひそかよ。門もんべ。同樹どうじゅの縁えん。雁かりを。恭うやま。
あづ盆あづぼんを。た。と。うらん。と。ひく。立たつと。叫よび。と。頃ころ。日ひの夜よ。經つら。あよ
女めを。使つかふ。更さら闌らん。と。と。役ひぎ。縣正けんじやうの。役ひぎ。打うちく。そ。が。ま。ふ。出で
されよ。衣裳いしょう調度ちうど。彼かれふそ。そ。や。調しらべて。椅いす。そ。し。と。り。そ。か。せ。よ。そ
れ。か。良よ人ひと。よ。うち。對むかひ。墓はか。た。の。人の。命いのち。今。秀ひで一いつ世せいの。剛ごう主しゆ。
そ。が。懸けんむ。本もと。二に世せいの。縁えん。役ひぎ。呂ろ。と。入い。が。そ。れ。と。在すく。面おもて。

ほ名を雪めて主親へ入事て忠孝の名を揚家と嗣ぎ。ひし造
エテモくすれども。猶のを痛くしてえもりへど。小保の人のつぶすは
あはれ。候さんとのひみて解る事無候べとあれば。す七日目と拭ひ。
昔ノ浮世に居るとも。ま婦りう其よ在て丁そ又慰るよとがと
され身と汚をとむ。知れ汚さざ。かする貞操が眞の貞操。よしや
なうれとありとも。身と愛一命保。再會の期を絶り。經氣ふ
遍てけり。歎き少すをせぬ。とつひ諭せ。涙よ圓臺で点て
のをす。やふ縁よ出で。圓樹よ身ひ恭。叮嚀ふ別と告。良人の
くそひ遺。言葉のとまへて。月へ隈る。夏の夜の。
脚がすれぬ。身ふ慰う。ゆつまセモ。端近く。同送。バ。圓樹へゆぐ
お花を挿て。件の行輿よ。あせ。す。七日て度よ出で。四五六全ぬま
宝刀と今宵へ。身のふ。と向べ。全ぬうち。点て。そのとへ。日易う。ま
乃縁ふ。どのよ。證文と。あつて。ね被ふ。と。指せ。四五六へ懷中
よ。證文と。う。出。と。月光。押ひ。と。ひく。一刀治。圓樹。同。す。七日。が。乞
あはれ。風流士の大刀の。右。權。改。度。下。一。り。る。而。実。て。依。て
某。こ。互。死。領。り。証。の。一。紙。と。携。あ。ば。件。の大。刀。と。遡。と。ば。き。者。う。
天文二十一年六月十六日。縁ふ。小保。莊司。判。と。ある。す。よ。流。す。て。おそ
は。七。ふ。ど。じ。せ。ー。う。ば。同。樹。ゆ。ひ。と。頃。つ。ゆ。メ。果。て。う。ら。点。頭。か。う。證
文。と。あ。の。う。ば。件。の。宝。刀。は。ま。七。が。ゆ。よ。あ。と。こ。互。あ。う。も。た。ゆ。皆。び
ま。う。と。つ。解。す。と。う。槿。あ。づ。行。輿。ふ。う。れ。夜。の。鶴。ふ。四。ゑ。よ
あ。ぬ。ま。の。顔。を。今。ト。う。び。と。ア。ン。う。且。が。お。う。と。筆。廉。ゆ。ま。う。ひ。う。雪。

一声啼ひき一杜鵑トキ血ちと吐ぬちりひとすまセマ仇仇よおらラ宿ヤマの花ハナ
ええてエエテどドあアあアびビ人のさサびビまマめメがガ詠ヨウびビよヨあアへヘすス。

四五六全ゼン从ツ只シ官カン行ヨハ輿ヨウとト逃ヲ走ハシ去ケ。

白夢南極後記卷之六終

(村田)

